

## 33. 季節 I (春)

我が国には四季という素晴らしい財産があります。北から南へやや斜めに細長く存在し、その周りを暖流・寒流が流れる海洋性気候の利点を十分に享受している島国ならではの、南の地方では春はゆっくりとやってきますが、北国ではある日突然春がやってきたきたという感じで花が一斉に咲き乱れ、新緑への衣替えと、日々の移ろいは駆け足です。

「春よ来い、早く来い」「春が来た、春が来た、何処に来た、山に来た、里に来た、野にも来た」

厳しい冬の寒さから、やがて春の訪れを感じるのは、日脚が長く伸びて明るさを増し、日差しも少しずつ強くなってくる‘光の春’、やがて‘寒さ暑さも彼岸まで’と言われるように、暖かさを肌で感じる‘陽の春’、そして北国では雪解けの音、雪解けを集めて流れる‘音の春’、小鳥のさえずる美声は、最初は弱く、やがて賑やかに、待ちに待った歓喜の春がやって来ました。

冬の間、冷たい北西の季節風を送り出していたシベリヤ高気圧は春が近づくに従ってその勢力が徐々に弱まり、換わって移動性高気圧や低気圧が日本付近を通過するようになります。「春に三ツ日の晴なし」と言われるように寒気と暖気のせめぎ合いが激しいので低気圧が猛烈に発達することがあります。



また、春は季節風の変化の時でもあり、低気圧に伴う強風が吹き易く、特に前線が通過する際には突風を含んだ強風が吹き荒れることとなります。

立春から春分までの間に日本海を進む低気圧に向かって南から猛烈な風が吹き込む現象があり、其の第一回目が‘春一番’、昔アイドルグループが唄っていたような訳にはいかず、しばしば大惨事を引き起こしています。



例えば 1978 年 2 月 28 日 都内を走る東西線、南砂町と西葛西の間にある荒川に架かる鉄橋を走行中の電車が春一番の強風に煽られて車体が浮上し脱線、横倒しになってあわや川に転落する寸前鉄桁でなんとかくい止めた事故がありました。東京湾から吹き込む南風をモロに受けたのです。

日本海にある低気圧に向かって吹く南よりの強風は温度が高いので、気温を上昇させ、日本海側や盆地ではフェーン現象が起こり、雪崩や火災の恐れがあります。また低気圧の通過に伴う寒冷前線の通過する前後には、南から北へ急に風向きが変わり、突風や急激な気温の低下があり、春の嵐は強烈です。

其の原因は太陽光の入射角が赤道（春分点）に近づき、更に超えて、北回帰線（夏至点）へ向かうので、入射角が大きくなって暖気が北上してきて寒気と衝突するからです。

季節の変わり目は、大気の運動の変わり目でもあり、時には猛烈に活動する季節でもあるのです。

春一番の次に来る大物は、春先東シナ海で発生した低気圧が短時間で猛烈に発達し、超スピードで太平洋岸を駆け抜けることがあります。これは冬期間張り出していた大陸高気圧に南から暖かい気団が北上し、其の先端が寒気と衝突して低気圧が発生するのです。

ですから台湾近海上空で衝突することが多く、その付近で低気圧が発生、発達するので、かつてはこの低気圧を‘台湾坊主’と呼んでおりました。ところが差別用語だとの意見があり、東シナ海低気圧とか、台湾付近低気圧と呼ぶように改められたのですが、どうも他の一般的な低気圧との違いが区別できなくなっております。

この低気圧の怖ろしさは発生から短時間で猛烈に発達し、太平洋岸を駆け抜けるため警報や予報が間に合わず、漁船の大量遭難事故や山岳での遭難とか頻発したのです。近年は観測システムがより強化され、警報も迅速に出されるようになったので事故は少なくなりました。またこの低気圧が太平洋岸をかすめるように通過すると関東地方は大雪にみまわれたのです。2月下旬から3月上旬にかけて何度か雪がありました。史上有名な2.26事件の日の大雪はこの低気圧の仕業です。最近は地球温暖化で東京での大雪などなくなりましたが、昭和四十年代前半位までは3月3日の国立1期の受験日早朝の大雪で交通機関はマヒ、地方からの受験生は慌てふためくことが度々ありました。

暗い話ばかりになりましたが、春は明るさへの季節です。水の上や新緑との間を渡ってくる薫るような爽やかを感じずる五月のそよ風を‘薫風’、この風が強くなりすぎると‘青嵐’となります。

空には鯉のぼりが舞泳ぎ、すがすがしい晴天が五月晴れ「目に青葉 山ホトトギス 初鯉」一年中で一番よい季節ではないでしょうか。でも一寸空を見上げて下さい。秋の澄みきった空と比較して、なんとなく白っぽく見えませんか？ 地表が暖められ急激な上昇流が発生し、塵やホコリが舞い上がり、それらが上空で浮遊しているため太陽光が乱反射するために白っぽく見えるのです。更に五月は日射が急激に強くなるために、一年中で一番紫外線が強力になる季節なので、特に女性の方はツバ広の帽子やサングラス着用をお勧めです。シミ、そばかすの原因になりますが、それよりもさらに強力になるとソコヒ、皮膚ガンの原因になります。我が国ではそこまではいってませんが、老婆心ながらオーストラリアで海水浴の場合は絶対に気を付けてください。砂浜での甲羅干しは禁止です。これは南極上空のオゾン層が破壊され、いわゆるオゾンホールから紫外線が侵入して南極に近いタスマニア島やオーストラリア南岸が被害を受け、若き白人女性の皮膚ガン、ソコヒの患者が年毎に増加しているようです。

紫外線を軽く見てはいけません。地球上での生命の誕生は海中であることはご存じでしょう。最初の生命はプランクトンですが、繁殖したのは藻類です。これが光合成で二酸化炭素を吸収して酸素を吐き出す作用が行われることによって、この地球上に酸素原子、酸素分子が加わって水、大気の組成が現在のように変化し、さらに酸素のうちのオゾンが上空に昇りオゾン層を形成することによって、それまで地球上に降り注いでいた紫外線をオゾン層がくい止めるようになって、やっと海中の植物類が陸上に上られるようになったのは海中に生命体が誕生してから20億年余経ってからのことです。更に遅れて爬虫類のような生物が陸上に揚がり、最初は両棲でしたが、やがて陸棲になったのです。

その原因は紫外線にあり、モロに紫外線を浴びると生命体の染色体が破壊されます。ですからオゾン層は地球上の生命体を護るバリアなのです。ところがそのバリアを破壊するフロンガスを放出しているのも人間です。このフロンは地球上にある元素ではなく、1934年ドイツの科学者が創り上げたもので冷媒に広く使われ、使用済みは気楽に放出しておりました。

私達も加害者で 車や冷蔵庫で使用したフロンガスを交換する際、使用済みボンベの残りガスをシューと放出して捨てていました。其の結果は南極上空のオゾン層に大穴が空いてしまったのです。知らなかったでは言い訳になりません。二酸化炭素の排出も同じことで便利さが優先して害を承知で排出を続けているのです。

さて、季節の移ろいに戻りましょう。春の遅い北海道でも五月になれば「リラの花咲く頃」を口ずさみながら春の歓びを満喫することでしょう。ところが冷たい移動性の高気圧がやってきたり、オホーツク海高気圧から冷たい北東の風が吹くと、春爛漫が一転して冬に戻ったような冷気になる「リラ冷え」があります。どうしてこのような現象が起きるのでしょうか？それは大気の中に初夏への準備と冬の名残との凄まじい闘いがあるからです。

山岳地帯では強い雨が降り、時には曇から吹雪に急変することがあって、山岳遭難になることがあります。また雪解けや雪崩による谷川の増水による危険、五月の山は細心の注意が必要なのです。

海上もまた五月は要注意の季節で、低気圧が突如台風並に発達、大時化となって遭難事故が相次ぐことがあります。この時期の発達した低気圧を「メイストーム」と呼び、時には「爆弾低気圧」と呼ばれて怖れられております。

例を挙げますと、昭和 29 年 5 月 8 日 日本海西部で発生した低気圧が、急速に発達し中心気圧がたった 1 日で 36hPs も急降下し、中心気圧が 960hPs という中型台風並の勢力となって、更に発達しながら、時速 80km、これは通常の 2 倍以上の猛スピードで日本海を北東へ進み、東北、北海道近海、日本海、太平洋の広い範囲で操業中の漁船多数が巻き込まれ、沈没、流失等 348 隻、死者、行方不明者計 361 名という日本海難史上最大級の大惨事となりました。同じ年の 9 月には洞爺丸事故があり、日本海難事故史上最悪の年になりました。

このように急速に発達する低気圧を爆弾低気圧と物騒な名称が付いておりますが、これは気象用語としてあり、「気圧が 1 日で 24hPs 以上降下するような低気圧を爆弾低気圧と呼ぶ」と定義されているのです。

穏やかな季節と思われる五月がどうして大気が大暴れするのでしょうか？「平地は春でも、山は未だ冬」と表現されるように地表面は暖かになっても上空には未だ寒気団が居座わっており、地表の気温と上層の気温の差が著しいのがこの季節の特徴です。

さらに南から暖気が北上してきて寒気を押し包むような形となると、護る北軍と攻める南軍の壮絶な南北戦争が始まり、歴史上では北軍の勝利ですが、気象の南北戦争は南軍の勝利になるのですが、最期の闘いのクライマックスが五月なのです。